



蒙
抄
句
集
新
編
下

中村俊定文庫

文庫 18

607

2





燕窩白集巻之下

新く部

院定蔵
几蓮著



此本は、合字を法 嘯の字
此らも何れもつらき 淫傷所
貧乏に追つて 此らもつら
此らも 苦痛 昏く 絶 薬 院
此らも 難ふの 針 石の 醫 院
此らも 難ふの 針 石の 醫 院
此らも 難ふの 針 石の 醫 院
此らも 難ふの 針 石の 醫 院

さる花を減あんとすはあまのこ

セタ

後ノ葉を朗詠集の志ありけり
志すはくおのふも白ひのり
はと入也きくくまふ子あや
あまのまやあまのまはく詠詠詠
魂を柳をくしきそめははあま
十六日の夕あまのり
あまのまあまのり

大方のやあまのまもたあまの

相所はのやあまのりやあまの
接待のやあまのりやあまの

英一蝶の画の賛をたて

田中くく月をたてあまのり
あまのりあまのりあまのり
あまのりあまのりあまのり

あまのりあまのり

あまのりあまのりあまのり
あまのりあまのりあまのり
あまのりあまのりあまのり

いふつりや望田白りの宵月かえ
稲妻あふちりし音や竹の露
春夜く白をとりて

日ころ仲よくて解あるまじき
心入の力者あやしく角力者
岩細や伝ふの角力ちりには
石舟き角力をかかみさう
おし柳のし

柳散花の洞石處と

小瓶の何しむせむし小瓶はら
たえらむせむしあらしむけかいら
みら暮て世ハ昔は昔は入る花は
あふ元ももさふらうをあそむ
軍人ハさともおもハしむしあはる
水西は柳ハあらしむせむしあはる
一冊をとりぬらむせむしあはる
社をたむせむしあはるのうら
あそむせむしあはるのうら

猪の露おしけをみゆき
白萩を春つらとるあまの
垣手潜る花いよも花穂たふる
まらももつるふたつお徳を

洞水ほめ歌

おらや一輪ほを洞のう
新貝やま成のちの露とら
おの蘭香うらたえおと白
蘭夕粧のれり素楠とむ

辨花を歌

花をををびらおちのけ花
あらし露やさら男の胸をぬる
よのぬれ露さらしつ 霜のうた

あゝ義山

まきより一里眉を柳の雪に
白きぬや秋の刺るひとる
結実のやまのつぼみは白
市人のおらう家裏の中

かろしや播川の舟をたぐりし時
かにむねと書きの程を聞かぬ
船のやまゝをたぐりし時

首の柳葉にけしきあり
おぼろのうたをたぐりし時

首のむねのうたをたぐりし時
船のうたをたぐりし時
船のうたをたぐりし時
船のうたをたぐりし時
船のうたをたぐりし時

おぼろのうたをたぐりし時
おぼろのうたをたぐりし時
おぼろのうたをたぐりし時
おぼろのうたをたぐりし時

おぼろのうたをたぐりし時
おぼろのうたをたぐりし時
おぼろのうたをたぐりし時
おぼろのうたをたぐりし時

臺てり葉中一さたささ
小百姓 鞠をれ老とあつらう
鬼灯やほお乃女う生写一
日ハ脚園底の繪うとんか
良辰とあつてもあつて

訪する人もあつれ

中一ひらあれいそ月をな
名月とあつらう押る下部
夕の園の孤ゆも通る月や

月天心を貫くさ町と海は

忠則古蹟一村乃松と倚け

月と青月松とくさ松たのけ
名月やあつと備へる地の人
名月やあつと備へる地の人

押る雨月

飛くよ雲のさるるの月
月とあつとあつとあつと
仲丸の魂をあつとあつと

○
若月やあひ人住め峰の草を
山の松や海を離れ月も片
危の月主ととも草花の
らさこの花の園こらふの月
鏝ちり解るや鬼義とて
玉山のすさたあらしとて
其の付とあそ眼伸よをて
月をんしてたのせうく砕くまの玉
花さうい形さうあるらふは

あついのうらふしとあいて

若月や神泉花の魚遊る

押歌雁字

一汗の屑や焼めく月と神を
紅の糸もとりすおまひるひとら
あついのうらふしとあいて
雨乃原あつたわらハ角てう
原をさし一用しかる原よ枯れ
原帰てさうとれ木末あれまう

草木島の雲おひらきし海は多
とくは啼くはみよきありぬ鹿の毛

残照を映池

藤ふら山影明く入日暮
ある山さへ海やたすくはた
葉を汲げはるる影を
あわらてあはれを
お白をとりしめて

藤のおりふ坊主と角あつた

ああ〜く明きやけ花の影

老懐

去きよりの又さへ〜のそおの音
又母のおとのみおのよおのれ
あち〜おのり〜おのり〜おのり

おのれおのり

我ごとく我を〜やおのり
門〜おのれを我も行人おのれ
弓おのり〜おのり〜おのり

淋一カに林ワきれたる秋の習

故人の別る

本名流りていつとわらへむいさ
る飛さや釣の糸はあきせ見
秋の風書ひさやと成るるり
金屏の羅ハ誰カあやめを
秋風や干魚けらる溪底

古人の移竹をあらよ

去来去物年物めいこれ

此水の目鼻書ゆくやるる
腋の中へ薫ハぬけりし物うる

四十よせりしておんあそ

ややととれ

あゝとらうあはれあきし物うる
人の世へ流とるたるやるる
我定うかゝるぬらうとあきり

古昔拾遺

此水流ったあきれ白のうら

姓名ハ何 子ノ号ハ母ノ山子ナリ
之類の田ニ改メテ居るカニシテ
山道や流海子なる川板の音
ヤ裡ニ居ルナリト云フ
とて我ノ口行ニシテ
ルニシテえゆるナリ
我ノ心ノ如クシテ
水落テ海ニ入ルニシテ
故ノ心ハ海ニ入ルニシテ

まは城邦ノ秋更柳の葉もまは
片の心もまはのこりて
落る日のくらくと深き
影もまは

題白川

黒谷の隣ハ志ヲわし
其の心もまはの心
三徑乃十歩ノ盡テ
甲斐ノ心もまはの心

川魚釣の舟舟槽なる急入前
 百日ろ鯉切をて 鮎のさ
 釣上ー鮎の巨口玉や吐
 ひとらと大あかきながのせりー
 くらぬ田疇きん藍てふさろ
 乙葉をたて志のせはれおき
 日影をたのせをばらう花の咲
 物さるるさふんあられ候ー
 水うれく夢れあめを あまき
 舌を

小舟ある音うれささねのけ
 け本もふかくさくろ野おー
 山花や極の光あう病が候

竹俣は所存つるに

くら鴨は眠る鴨あのかは所
 略立て秋天いさくたのめ
 けりるあをせせしる林
 りふ智やの機まのあや
 隙田降て志質の夕月や江鮭

お途ちとてゆりや 額白
社乃暮春の地をう油さまで
秋の煙やゆりちと奈良の乃さ市
追剥をせ子う物さう秋の菰
秋の雨や水底の草を踏らば
かしんびり書きたと画さるに
滞りせとゆきとくしを

かのうカ乃眉より吼ておまの秋
甲賀の嵐の志のいの賭や座すは秋

秋上秋の秋をさるる刀のさ
カの秋やとカカとまのよおまあり
我則ある

會催

小路りそちくおまのふいふ
ささくさささささささささ
さささささささささささ
さささささささささささ
さささささささささささ
さささささささささささ

ち羽衣の五六段いそぐゆらけ
 明子の老筆を数食の物らふ
 移るる我若妻存すゆらけ
 市人のよは同くいそぐゆらけ
 客僧より二階下り来る物らふ
 三井の山上よの三上山よゆらけ

秋産し若たう鐘ゆくは
 角ふ字のいそぐゆらけ
 くら枯やくらさめんはる漆の樹

花中葉くらさめんはる芭蕉は

斗文又より八十のゆらけ

おとくくくくゆらけ

稲うけてゆもひらけ老の松

廣は

水うけて地のひつみやゆらけ
 山草をんの本あらんをくらけ
 泊るる我若妻存すゆらけ
 十月のそ方ハ志くらけ後此月

十二の月のていふは

我日のもの此風流と云う

唐人とげらるるそのち月

日てりて伏水のふりまらふ

山流の菊をさうちうりう

あるの菊を張るをさう

不白もさうりれ

さうの雲をさうりれ

いてあらも投壺をせん

菊の左の菊をさうり

白菊や呉山の雪をさう

手燭して色失へる菊

村白戸菊をさうり

あははははははははは

菊のついでハ菊入 奴

高碓

西ちりる菊をもめて

ひはち田く菊をさうり

谷水の書きておるももみちが
からてるるなはさるるのみ地
むらぬ舞ふは南人たのしき
はなるこ

笛の音く時もよのまの海は秋
雨とれ少所ら果やととら
おくのらぬさくら文か落し水
そんどの舟は下せぬ上川
新米の故田にはもうみは

養種拾い日あるかあゆり

山家

拾ふのねをばゆく免うさ
望際よのなはすおはら
欠くて月もあはるおはら
起る屋より一病はるおはら
おはらとて山冠者外より山花
もやちや通夜の連音のふれ
ひきの拾得ゆるおはら

子氣のちいしき帝や詔はれ秋
秋風や酒肆の詩くさ推者
秋のあつとせはる作もあつて

幻住庵の燈籠

旅病して行かして

丸盆の雅くむらじの音やむ
雅振ふ播らの心のはる

探歌

餉くくしき身やとから

流して蔵め蓄めり番椒

おろし心こらさし梅もさ

梅もさよおや念珠とけさ

けさよよとまめ垣根や番椒

稚子乃寺ふりむいてさ

几筆と書所をさ

草子や改を筆れて峰の月

茶釜は伏う丸 杉木強ハあられぬ

くさき其こあふりたるむら

思ゆしや秋酒の申のま貝く處
聖修よ惠心の伝ふ所地佛
あきまらしたをきて新改毛

あな字あり

く水の秋五蔵のくハ宿く正を
いしふふと^慣いれぬ暮の秋
り秋やあきなきたる秋く
詠うは師の方や暮の秋

あきまらしたをきて

あき

あきまらしたをきて

わら部

みのひのおんりにし物す由
初志を眉に鳥羽のさか
楠の根を静にぬらす時
あふらわ義堂少くの時
しるやや海のつる其の上
志命のほたてのひのひ
あふらわ秋もたけのあつ
しあふ暮いそぎ青く悲の貴

くしう尾のひぬりて松の
丹楓を結ぶゆりひの
十のまうは葉葉を結ぶ
やそとらうとあちりたる
あふれあふれ

ゆきつづくはあふらわ
初おらや日記みゆり
居眠りてあふらわ
あふらわ壁をたけりの子

花の糸結く下へ書すはこれぞ
清きまへに誰か書きよとぬるのう
ねりり伊はるるはあつりり
東山より移るに往るるりト
たの二音は伊よりせと

花雪とまへに川谷の橋を
いそせしきんちりり伊はるの
ちりり伊はるのちりり伊はる
のりりやけん襦へや古念

大兵ろりりああるは菊園
席の座を踏くは根のちりり

十
八

あふたはと茶もたぶくともちりり
はるるちりりともちりり伊はる
いとあつりり二柳はる

簾坐る夜陣はるるはあつりり
白鳥りりや大のちりり屏の内
柳花のちりりともちりり日ちりり

茶の花や白まじ草のにおいも
茶乃そふや石をさうりて路を丸
咲居るもおりりあるを石の花

はきさういさふりれて星侍

去る下お氏の別書まおひ

早ゆや止し前ふんとおのめ
はゆや少ゆ下ふら只あら
解ひさや雪ゆ凡のうなゆ
旅たや韻麟う向れたゆる

一糸もさつ初のもた初風を

とさ習ふああるを初と

とまにけ橋あくのゆて

羽織もそ舞もさくおや川をり
風あそのゆさうら月の子なるは
改らとりまをありておひさう
おゆさるはやあなるの折ちり
山もや百姓ふらうこく大取
里もてさ江はるをとてけさう

水石の舟より草花を度ふ女この
かき添く入る火を徳音や小石の

春星の南風を梅をよめる

浪の舟にさしこされ都なる

子梅の西室の里乃志を春夜

宗任子少絶るを月を月

くしを能くおぼしむ

相違ふは所をころねるを

おぼしむ甘る風を梅を

小春風を花もを命ユタマの春

ぬの梅の舟を舟の石のど

と梅の舟を舟の舟を舟

きんりの舟を舟の舟の舟

老女の舟を舟の舟を舟

小舟の舟を舟の舟を舟

つれを舟を舟の舟を舟

うしを舟を舟の舟を舟

舟の舟を舟の舟を舟

息休子石の火とるたる枯竹の

金梅寺並老梅臺

我も私で得く道心枯竹元
るの庵くいさうらるる枯竹元
蕭條くして石より入枯竹元
大身う病の復常とこの。

夜醒や病よの起つか寝
待く人乃是ま月なをて
菊の黄く雨降りくく

た寺のありあははけい
従ふも侍て畑田をうける
暗葉を拾いて残る梅の
おーらるるがくも
届るのよるはされも
おのそのちおぬたる
ふはち我をいふ
りら草柿の
西次もさくたおるの

鮫けの宿赤くと鮫一と
 けの我流で居るおまは
 秋月の号ふふとけとけ
 青ふせとてゆく流を鮫一と
 河豚の面世よのくで白眼哉
 走らうて鮫よの友とむ
 袴とて鮫の居る所を
 産英ハ向家あて信うを
 おのこしをせとまいていこ

鮫を鮫者佛とて居る
 流を流とて居る
 うとくの流出るや取らる鮫
 大魚の兵庫の強橋を
 几重とてた流はく
 とあをを鮫とて居る
 風と鮫吹やや鉤の魚
 こらやひと居る
 からや島の少石月とて居る

こりや何かせらるゝふせは
風や木の吹きて多き花の風
木花や清く山石を映あて
ふらりや岩より裂けり水の音

晋子とすと同

播盆の形とこもや寺すゝ
孝翁や百やて生る白く
初雪や清れを又そめ霧
初雪もろく庭を叩て竹の月

題七歩詩

雪おや雪を扇く華金の下
雪の習野ふゆりて飛ぶ
うつみちや我らも家も雪の中
いさ雪見 カクキチツクリ 小谷す 心最とんま
福きけて淀の小橋と雪の人
雪白いかげの女くさてして
雪おややの世もまればよめる
酒家に酒を飲入り雪を掃

影をちや室の鏡の物さけ
入るのよきもつらぬ物さけ
影をちや鏡をたぬる人
宿をさめぬ影や雪のまはさ

几重の信筆より海さ

雲を百里舟中く我月を欲す
故く鏡も余のまはさ
守りて海をたぬる
影をちや在再とて晦朔の

代海をたぬる影のまはさ

たるよきもつらぬ物さけ

影をちや鏡をたぬる人

陶弘景の詩

山中の相 雪の中をたぬる
影をちや鏡をたぬる人
川より舟をたぬる影
影をちや鏡をたぬる人
影をちや鏡をたぬる人

けりやゆめをなすもくもくありひたり
 花をよみて候へ世もさへは子
 我ひ中へま世のよはまひまはふ
 さきまこひ中へたかく羽あり
 び中へまき音にのこのゆめはあ

引よみ

鳥をさやゆめをさまたちも妹は許
 うふんをや取らま世へる候はら
 かの舞もるもあへははけたる

吾子うは信く首さそああ

物々備ふ

うらえちやまもくもくあふ
 新有美の地足をも候ふれ至ふ
 書記典主の國の想ふたむ
 水仙やまもくもく都のまく
 水仙や美人のまもくもく
 ふ仙や賜のまもくもく
 れさしやまもくもく

衰あ北て垂を刈れぬまふ
 葱常て枯木の岸を海らふ
 して此少枯風古葉を裁
 見少くあつる風をささる
 血を踏 露は音乃 心

郊外

静ぬるう此木らやぬの月
 静ぬるう月、障をいふ
 おの句ハ夢を感せし

同二句

二打う 骨を一刺ぬまふ
 おのむらう人の猿にぬまふ
 骨を三みとあつてやぬまふ
 骨入して香をぬまふ
 骨を三みとあつてやぬまふ
 一瓢のしんて高ぶぬ神たき
 おれにしの坊主のしんたき
 少ふふのそれハ骨を神た

ねえ春太 雪うら君あり神
雨合ハハハハ ぬき里ををら枝
必大積るより歌ひて

必大積るや春太 ぬき里ををら枝
必大積るや春太 ぬき里ををら枝
必大積るや春太 ぬき里ををら枝
必大積るや春太 ぬき里ををら枝
必大積るや春太 ぬき里ををら枝
必大積るや春太 ぬき里ををら枝
必大積るや春太 ぬき里ををら枝
必大積るや春太 ぬき里ををら枝
必大積るや春太 ぬき里ををら枝
必大積るや春太 ぬき里ををら枝

白貝居ハ詠

愚々耐よと意を晴も雪の
この名に漢はて賤し一を苦む
我の此れは果おくるををら枝
紙ををらお目さくありれこ
氷るれ乃沖うらうら角のな
おれれのひさこ火桶の並い居る
我を融ふ隣ををら福を唱は
崖 齧る等乃氷を吐しおら

一玉穿り矢程のそるあらぬ水
玉をぬ浮舟の福をのみたはれは
古池の草履はきいておとれは
山水の減るを減りて水あな

徹素堂

就鑊物則く齊うつしきあり
うらぬま腰する市地なると
うらぬまけや帯刀あり乃高
禮法師 軋舞 臥の吹を彫

鐵骨よふハ梅の枝を

字をる画はし

々梅や火の送る 鐵かざより
々梅をともお富や老う時

感偶

々月や門たの寺の天高
々月や鑪山石乃あゝら海
寒月や枯木の伸乃竹之竿
をくや左徒の群議の道ては

さきもやたさく池入誰り子と
 和らまたりり声やさき佛
 換束の近及くたさ念佛
 を旅離や上の所ま来りたり
 さきよりやいさあつそよこも痛

几董判白合

舞を奏あり、刀を齧くより
 去りくと立海底くう茶葉に
 茶喰隣の真主 箸おみ未

さきり管入く清くも麻ヶ合
 妻あやされ島息もたは茶葉に
 客僧の和島入やくさきり管

春沙中うおし

君運もこよいかゆるせとく志
 にはさ木のまをたの難魚おし
 おらりやや枝も控ぬとち獲心
 らくはさ乃啼や御走のれさし
 湯経くみそやうさと右左目

とくはらう後るや雪のふ所を
ゆくはらう世田を廻るや金む脚
とくはらうたさくたさくたさく

歌昔

石公へ五百目りしやとこれれ
とくはらうや鼻睡のたか膝乃捧

とくはらうたさくたさくたさく

芭蕉去てそのちいさくたさく

蓋打白集下巻終

秋半尋常よりへらく歌白集に於ては
ありたりしやと名たる人乃其白集
出づ日來の色美を減するもの多し
況んは乃半をやと志するた門紙は一人の
書付ありてあるうちよ白集を梓もちり
ためむしよとむむねをとりゆるさす
る減はよきたらとて二とまりとめおけを
あつて是を前後乃二編を撰りて
小祥大祥二巻の追福のためとすや

其志又涉... 乃本意... 田福志...
 其志又涉... 乃本意... 田福志...
 其志又涉... 乃本意... 田福志...

天明四甲辰之冬十二月

大坂書林鹿島献可堂藏版目錄

七女子詩集 小本 一冊

同 掌故 三冊

同 註解 二冊

同 國字解 二冊

同 七律解 二冊

詩法授幼抄 小本 一冊

斧介集 詩聯書全 一冊

詩對類語 同 全 一冊

詩家法語 熟字全 一冊

發蒙書東式 三冊

傷寒五法 五冊

茶道七事式 二冊

町見辨疑 西川氏 五冊

三界一心記 一冊

將棊指覺抄 小本 二冊

神代古訓抄 一冊

繪本廿四孝 一冊

伊勢參宮名所志 六冊

金石圖式 三冊

茶切適 一冊

農家心得草 一冊

狂歌芳分船 一冊

書目録

新秋桐火桶 宝書 二冊

新元法 蘇村著 月漢画 一冊

世説新編 蘇村著 二冊

同拾巻 右の巻を改題して 二冊

其角新集 宗澤著 二冊

同元集 著者不詳 四冊

同拾巻 著者不詳 二冊

同小休 著者不詳 一冊

同拾巻 著者不詳 一冊

同拾巻 著者不詳 一冊

同拾巻 著者不詳 一冊

俳諧小づち 小本 一冊

同来かり 著者不詳 一冊

同四季歌 二柳庵全 一冊

同拾巻 同人著 一冊

同小休 撰者不詳 一冊

同拾巻 著者不詳 一冊

同拾巻 著者不詳 一冊

同拾巻 著者不詳 一冊

同拾巻 著者不詳 一冊

同拾巻 著者不詳 一冊

同拾巻 著者不詳 一冊

瓢水発句集 四季の句 二冊

蘇村発句集 蘇村著 二冊

二柳庵句集 二柳庵著 二冊

西行集 西行著 二冊

俳諧分歌 著者不詳 六冊

發句入門 著者不詳 一冊

たり大打 著者不詳 一冊

毛吹集 著者不詳 一冊

同拾巻 著者不詳 一冊

同拾巻 著者不詳 一冊

同拾巻 著者不詳 一冊

繪本太閤記

法橋玉山畫

初篇全部十二冊

同二篇 日画 十一冊

同三篇 日画 十一冊

同四篇 日画 十一冊

同五篇 日画 十一冊

同六篇 日画 十一冊

同七篇 日画 十一冊

繪本太閤記拾遺

全部二十冊

繪本二十四孝

法橋玉山画

全三冊

同増補二十四孝

右の二十に孝の字を改題して

諸國武邊嘯

全六冊

繪本欵討白石話

岡田玉鷗画
法橋聖山添削

六冊

繪本欵討金毘羅利生記

筆者同上
近刻

繪本修笑猿實記

画圖同上

近刻

繪本欵討天下茶屋録

画工同上
近刻

繪本欵討龜山談

画圖同上

近刻

繪本毛谷村六助

画圖同上

近刻

繪本猿か橋欵討

画圖同上

近刻



